
デュ

KMY

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デュー

【Nコード】

N5998E

【作者名】

KMY

【あらすじ】

小学5年生の利夫は2ちゃんねるを荒らしているところを母に見つかり止められる。しかし、何者かによって再びデューが書きこまれるようになり、そして政界の重要ポストの銃撃事件が相次ぐ……。今まで魔法ばかり書いていたKMYが贈る、衝撃的サスペンス！

File 01 dew to go bananas (前書き)

冗談半分で読みきりで書いて見たのですが、なんかおもしろい話になりそうだったので、その読みきりをもとにして連載する事になりました。不定期連載ですが、よろしくお願いします。あ、あと、あちこちに濁点の間違ひがありますが気がしないのでください。

最初のうちはちょっとつまらないのですが、利夫が母に荒らしをやめさせられてからが面白いです。

注意！！この小説は、掲示板の荒らしを推奨しているものではありません。

注意！！この小説には、ハッキングのアルゴリズムがさらっと出ていますが、アルゴリズムを提供することによってハッキングを助長する目的で書いたものではありません。また、それぞれのアルゴリズムは、僕のハッキング技術の不足により（とゆかそんな技術あったらだめですってば）全てこちらでのテストはしていません。（いやだからテストもしちゃだめだから）なぜアルゴリズムを書いているかといいますと、「あれをああした」というハッキング事実だけを記述したら平べったい内容という印象を持たれかねないからです。ああ、それとハッキングはやめましょう。

その日の空は、青かった。雲が点在し、飛行機も飛んでいた。東京の上空は、まるでそこにいる人に囁くかのように、風が吹いていた。

屋根は、濃い茶色。その家の2階の窓から、一人の少年が見えた。半袖の服。彼は、デスクトップパソコンのキーボードを叩いていた。画面に映っているGoogleの大きな画像が消え、テキストが現れる。

少年は、暇つぶしに、「デュー……」とかなんとか、適当にキーボードを叩いていた。

「……ん？」

少年は、検索エンジンが一番上に表示された、「アサヒ デュー Dew の騒音周波数解析」という文字に気付いた。えっ？アサヒって酒の会社だよな？酒がどうして騒音に？少年は、別にデューという言葉にそれほどの執着はなかったが、気になったので、そのリンクをクリックした。少年は、そのブログのページをしばらく眺めていたが、やがて、何かを思いついたような顔をして、F4を押し、キーボードを叩いて、入力した。

” www.2ch.net ”

空は、青かった。ただ、青かった。それだけのこと。どのスレでもよかった。少年は、適当なスレを選んで、レスした。

” デュー…… ”

そうして、そのスレの最後にすらりと並んでいる、この長い棒が、少年には魔法の棒に見えた。少年は、一人の部屋で、笑い出した。そうして、もう一度レスしてみる。

” デュー…… ”

”デュー――――”

”デュー――――”

”――――”

「昼ご飯よー」

下から母の声でしたので、その少年、霧間利夫きりまとしおは、まゆをしかめた。

「上で笑っていたけど、何があったの？」

食べながらテレビを見ながら、母は言う。

「い、いや、何でもないよ」

利夫はあせった。それが顔に出ていたが、母はテレビを見ていたので気付かなかった。

「そう」

母は、そう言って、うどんをつかんだ端を口へ運ぶ。

昼ご飯を食べてから再びパソコンを起動した利夫は、再び2ちゃんねるにアクセスした。それにしても、20秒制限があればいたずらなんで……。利夫はしばらく思っていたが、やがていい事を思い付いた。

利夫は、スタートメニューからプログラミングソフトを起動し、最初に出てきた画面で、新規プロジェクトを作成する。テキストエディタでプログラムをざつと書き込む。

「ええと、ブラウザを更新するクラスって何だっけ……」

利夫は、面倒くさそうに立ち上がり、パソコンの隣の本棚から言葉の本を取り出すと、再び戻ってきた。

「ああ、これが」

利夫は、さらにプログラミングを続けた。

画面に20のブラウザ部品を置き、1秒1つ、順番に更新するの

を繰り返すプログラム。これで、投稿ボタンを押す手間がなくなつた。利夫は、しばらくの間、それを眺めていたが、やがて面倒くさいことに気付いた。

2ちゃんねるは、最大レス数が1000。つまり、1つのスレをこのプログラムで終わらせるには、1回の投稿で20秒だから2万秒、約5時間もかかるのである。やってしまったからには、しょうがない。利夫は、幾たびも不快な気分を襲われた。

「……そうだ、ハッキングすれば何とかかな」

利夫はふとそんな事を言い出し、グーグルに戻って文字列を入力してみる。

”ハッキング 方法”

そのころ、2ちゃんねるの常連たち、いわゆる2ちゃんねらーたちは、あるスレを立てていた。

”デュー———————対策本部”

———そう名づけられたそのスレは、まるでデュー———————を許さぬかのように、速く進んだ。

”管理人に頼んでアクセスできないようにしてもらおう”

”それがだめだったら、せめてh t a cだけでも(あ)”

”荒らしちゃダメば”

そのスレは、冗談半分の雰囲気はしていたが、スレ主(スレを立てた人)は、最後にこう締めくくった。

”管理人にデューバカをアク禁にしてもらおう 賛成 よしよし 俺メールするわ”

File 01 dew to go bananas (後書末)

To be continued

利夫は、その晩も、パソコンを付けていた。ハッキングの方法を、鋭意勉強していたのである。そうして、誰かレスしているかなあ、なんて書いたのかなあ、と気になったので、2ちゃんねるを覗いてみる。

「……………ん？」

その一番最後には、「デュー……………対策本部」と書かれたスレがあった。利夫は、まゆをしかめて、そのスレをクリックする。スレを見て行くうちに、利夫は、焦燥に駆り立てられた。アク禁その冷や汗は、アク禁にされるくらいならいっそのこと、に変わった。

利夫は、それを行動に移した。

”デュー……………”

”……………”

そのスレに、デューを書きはじめた。

”デュー……………”

”……………”

”デュー……………”

”……………”

”デュー……………”

”……………”

「そういや」

利夫は、ふと思い出す。そっか、さっきの「連続投稿エラー」は、同じIPだからエラーが出るんだ。ということは、IPアドレスを変えれば……。なんだ、ハッキングする必要ないじゃん。

利夫は、慣れた手つきで、再び新しいプログラムを作り始めた。IPアドレスなどを記録するレジストリキーなんてあったかな、と

か、パソコンをいろいろいじってみる。

そうして、40分程度で、IPアドレスを変更させる処理を作り上げた。利夫は、早速その処理をくんだプログラムを起動する。0・1秒間隔で新たなIPアドレスを要求するプログラム。

利夫は、そうして、次に投稿した時の真っ白な画面で、F5を連打する。そうして、その全てが成功するこの快感。

「はははっ・・・」

だめだ、まだ笑ったら、怪しまれる。利夫は、そうしていながら、さらにF5を連打するが、今度は、連打することにもあきてきた。今度は0・1秒間隔で連打してもらおうプログラムでも作ろうか、と利夫は思いつく。

しかし、それは単純なことではない。そんなことをしたら無線LANがつまってしまうかもしれない。というのも、ブラウザでは特定のページを要求すれば、必ずそのページの内容をサーバーから受信してしまうのである。この受信の部分がうるさい。送信さえできれば投稿は済むのだから。

そこで利夫は、次は送信だけをするプログラムの試行錯誤を始めた。

次の日の学校の教室で、小学5年生の利夫は、友達の啓から、デュー騒ぎが今朝の新聞に小さく載っている事を聞かされた。利夫は、嬉しそうな顔をして、家に帰った。そうして、早速台所へ行って、今日の新聞を見してみる。普段はテレビ欄ばかり見ているのだが、広げて社会面を見ている利夫に気付き、皿洗いをしている母は、にっこりとしていた。

「あつた」

利夫は、興奮していた。利夫は、にやにやしなからその記事を読み終えると、さっさと上へ行った。

「よし、動かすぞ」

利夫は、ゆうべ、今日に取っておいたプログラムを起動する。1

” デュ—————

”

” デュ—————

”

” デュ—————

”

「何なの、これは！利夫がしたの？」

利夫は、真っ青な顔で、こくりこくりと、懸命にうなずいた。母は、今にも割れそうな、真っ赤な顔をしていた。

その日のうちに、パソコン使用禁止が定められたのは、言うまでもない。パソコンには、ログイン画面で母の設定したパスワードでブロックされた。

その夜、利夫は父にも叱られた。

「やれやれ・・・利夫がいるんだから、戦争が無くならないんだぞ！」

父は、こう怒鳴って、説教はお開きとなった。

「とりあえず僕が謝っておくから、パスワード解いて」

父が母にこう言っているのを、利夫は、体を震えさせながら、聞いていた。

なぜなんだろう。なぜ、僕はこんなことをしたんだろう・・・。

利夫は、そういった罪悪感を、初めて抱いた。利夫は、居間から窓の外を眺めた。窓の外には、荒らしを始めた昨日と同じように、黒い空に、灰色の雲が浮かんでいた。まるで、今日は昨日と同じであるよ、となくさめているかのように・・・。

File 02 the end of yours (後書)

To be continued

File 03 dew remarked

その3週間後、全ては始まった。

”デユ――”

――”

この文字列が、2ちゃんねるを再び席卷し始めたのは。

”デユ――”

――”

”デユ――”

――”

”デユ――”

――”

それは、利夫の仕掛けた速さを、はるかに越えていた。

「これって、合法よね？」

一人の女が、パソコンを見ながら言った。そこは、どこかの地下室かのように、そして照明は控えめであるのか、薄暗かったが明るいことには変わりなかった。

「それは、君の頭に任せるよ」

椅子に座っている女のかたわらに立っている男は、そう言った。

「そうですか」

女の人は、それだけ返すと、エンターキーを押す。

”デユ――”

――”

”デユ――”

――”

”デューーーーーー”

「しばらくの間、パソコンはフリーズ状態になるのですが」
女が言うと、男は笑い出した。

「そういったループならフリーズくらいするさ、ループを終わらす条件は？」

「はい、カテゴリの半分程度です」

女はそう言うと、席から立つ。周りには、たくさんの男女が混ざって、女と同じように、席に座ってパソコンを触っていた。

「マハール様」

マハールと呼ばれたその男は、にっこりと女を見る。

「さて、あと2、3日もすれば、警察も動くからね、その前にちよつとした準備をしておかないと」

「そうですね」

マハールの気楽そうな顔と対比的に、女の顔は暗かった。いや、まじめだった。

「とりあえず、君に殺してもらおうかな？」

「はい……………」

女は、しばらく深呼吸する。

「私は殺すのはあまり好きではありませんが、マハール様のご命令とあらば」

女はそう礼をすると、歩き出した。ドアを開け、部屋を出るのを見て、マハールは、先ほど女の座っていた椅子に座る。

「すばらしい……………！全ては、3週間前の荒らしから起草した…………。すばらしい芸術…………、むしろ感謝したい、あの少年には」

マハールはそう言って、笑い出した。

「明日の朝ころには、あの少年は死んでいるだろうね」

そうつぶやき、立ち上がる。

その少年、霧間利夫は、学校の授業中に、窓の外を眺めていた。パソコンを禁止されてからかれこれ3週間。疲れた。利夫は、窓の外で、運動場、他のクラスの生徒達が思いつき走り回っているのが見えた。そうして、利夫はもう一度ため息をつく。

「霧間」

数学の先生の声がしたので、利夫はあわてて前を向く。

「せっかくだからこの問題に答えてもらおうか」

先生にそう言われ、利夫は、ゆっくりと立ち上がって教壇へ歩いて行く。そうして、白いチョークをつかみ取ると、黒板に書かれている問題に、すらすらと解を書き始める。

そうして書き終わった時、数学の先生は不満そうな顔をして、利夫に声をかける。

「いくら簡単だからって、授業はちゃんと聞いておくものだぞ、義務教育である以上」

「はい」

利夫はいつもの生返事をして、席に戻る。先生は、利夫のそのなれた手つきを見て、はあつとため息をつく。

授業が終わると、利夫の席に孝^{たかし}が寄る。

「やあ」

孝はそう言って、持ってきた弁当を、利夫の机の上に置く。

「今日もかよ」

利夫は、にこつとしてそう言い、自分もかばんから弁当を取り出し、孝に追従して開ける。

パソコンをしない生活にも、すいぶん慣れた。利夫は、再三、窓の外を眺める。

「こんな生活も、悪くはないな」

利夫がつぶやくと、すぐさま孝が尋ねる。

「え?」

「あ、いや、何でもない」

利夫はそう言って、弁当を食べはじめた。

” デュ
――
”
” デュ
――
”
” デュ
――
”

着々と、その書き込みは、増えていった。

そうして、それは、利夫の荒らしの時とは違い、レスだけではなく、新しいスレも立てるのである。しかも、利夫の時と比べて高速であり、必然的に、そのカテゴリの掲示板は、503エラー万歳となった。

しかし、利夫とは違うやり方で、直接サーバーのコンピュータをハッキングして「デュ―――――」と書き込むプログラムをサーバーのコンピュータから起動させているため、妨害するほうは503エラーを心配する必要はなかった。もちろん、ディレクターパスやログの保存形式は、前もってハッキングして掌握しているため、それは用意周到かつ高度な荒らしとなった。

” デュ
――
”
” デュ
――
”
” デュ
――
”

パソコンというものは、非情にも、言われたことをやる、ただそ

れだけの機械である。したがって、その善悪は、感情がない限り
区別ができないのである。

File 03 dew remarked (後書き)

To be continued

この小説には専門用語がいくつか(いくつかというレベルではないのですが)にかくたくさん(出ていますが、お手数ですが僕は説明が苦手なので、その都度調べていただければ幸いです。

”デューーーーーー”

この荒らしは、2ちゃんねるを蔓延していた。全てのカテゴリにおいてそれは荒らされ、デューーーーーー以外の投稿は全く見えなくなった。

2ちゃんねるの全てのスレの全てのレスは、全て同じ語句で、スレが立つてからわずか3秒程度で過去ログに収められるようになった。

そのことは、その日の夕刊にも掲載され、テレビの生放送番組でも放送された。。。

「では、これで野球部の活動を終わります。気を付けて帰ってください」

夕暮れを迎えた運動場野球部の顧問が言うと、土に汚れた白のユニフォームを着た生徒達は、一気かけ声をかける。

「はい！」

「解散」

顧問の先生はそれだけ言い、生徒達が更衣室に行ってしまうと、ぱつと、ポケットの携帯電話を取り出し開いて、かちかちと操作をする。

「…………やはり、か」

その先生、澤村先生は、2ちゃんねるのスレ一覧を眺めていた。そこにあるのは、デューばかりである。一体何が起こったのか。澤村先生は、そうつぶやいて、西を眺める。日はすでに暮れていたが、残光が地平線を照らしている。雲は殆どなく、いい天気だった。

その次の朝、利夫は、玄関で靴を履いていた。

「今週も練習？」

後ろから母が尋ねてくる。

「うん」

利夫はそううなずいて、かばんを持って立ち上がる。

「せっかくの土曜日なのにゆっくりできないの？」

「今日は午後もあるから」

利夫は、無愛想そうにそう返す。そして、土のこびりついたそのユニフォームのベルトを、ぎゅっとしめた。

その時、家のチャイムが鳴る。

「あら、お客様」

母はそう言って、サンダルを履いて家のドアを開ける。

「もしもし、どちらさま……………」

ドン

銃声が響いて、利夫はいきなり顔を真っ青にする。母は、母の頭は、血は、血は出ていた。頭の前後に、一本の棒を描くように、出た。母は、そのまま、うつぶせに、横になった。

「ああ……………」

利夫は、震えていた。

「あ……………!!」

「おはよう」

突然、聞きなれない女の子の声がしたので、利夫はびくっとして外を見る。そのまま玄関に入ってきたその少女は、拳銃を利夫に向けていた。

「あ……………あああああああああつ……………」

利夫は、夢中で、土足で玄関に上がり、わめき走りだした。しかし、利夫の周辺、そこ、そこ、上、左、そこ、ほれそこと、弾は、次々と、壁、床、耳をかすって前のドアへ、次々と強くぶつかる。

利夫は、夢中で階段を上って行くが、ドン、ドンと、少女も階段を上がってきたようで、弾が再び利夫の頭の両方の壁へぶつかって

ゆく。

利夫は、顔を真っ青にしていた。そうして、夢中で自分の部屋のドアを開け、慌てて押入れを開ける。そして、慌てて隠れる。次に部屋に入ってきた少女は、部屋に入って最初に見えるのがドアの向かいの開いた窓だったため、それを睨んでいた。初夏の下がりで、風を入れるために窓は最初から開いていたのだが、少女はため息をつく。

「ん？」

左に、開いている押入れがあったので、少女は、今度はその押入れに銃を向ける。そうして、一步、一步、押入れに近付いてゆく。

近付くな！離れるおおおお！！利夫は懸命に、そう念じた。しかし無残にも、少女はしゃがんで、その押入れの中に入って、箱をとけ始める。

近付くな！来るな！そう念じる利夫の思いも虚しく、押入れにたくさん入っているダンボールの箱は、二つ、三つ、乱暴にとけられていった。

近付くな！来るな！ああああああ！去いね！どっか行け！利夫は、心臓をバクバクさせながら、心でそう念じた。しかし、少女は、利夫の思い虚しく、箱を次々とけていった。

そうして………。

「いない」

押入れの箱がほぼ全てとけられた後、少女は、押入れの奥の薄暗いところをも確認するが、そこには誰もいない。

「はあ、逃げられたわ」

少女はそう言って、拳銃を持って立ち上がると、その窓の方へ行き、窓から下を見る。少女が背を向けている隙に、開いたドアの陰に隠れていた利夫は、そーっと、ゆっくり部屋から出て行く。

「これじゃ、マール様に申し開きも……ん？」

少女は、足音に気付き、後ろを見る。

「ひっ！」

利夫は、一目散に逃げ出した。少女は、一つ弾を、利夫の頭に向かつて撃つたが、利夫がすばやくよけて走り出したので、それは壁に当たった。少女は、走り出す。
「待て！」

利夫は懸命に階段を走り降りたが、少女は顔に笑みを浮かべて、次々と撃つてゆく。その一つが、利夫の耳に再度かすれる。耳からは血が出たが、利夫はその血を気にするようなこともなく、一目散に、もともと土足だったので、夢中で母の背中を踏み、玄関からかけて家を出る。

「あああああああああ~~~~~っ！！！！！！」
ドン　ドン　ドン。

「そっかぁー、逃げられたんだ」

ヘリコプターから下を見下ろしながら、その男は、無線に答えた。

「はい、申し訳ございません、マハール様」

先ほど利夫の家を襲った少女は、服に隠していた拳銃をそこで買った手提げかばんに入れて、街中で無線で話していた。マハールと呼ばれたヘリコプターのその男は、気楽そうに言った。

「大丈夫、そこはメインじゃないから」

「えっ？」

少女は一気に、びくっとする。

「メインは、こっち」

マハールは、そう言つて、隣に座っている男に軽くウイングする。その男が、持っているボタンを押す。

バーン

ヘリコプターのほぼ真下にあつたビルは、大きく爆発して粉々に碎け散った。

「い……………今の爆発音は？」

「ははは、2ちゃんねるのサーバーがあるところだよ」

マハールは、笑いながら答え、そうして、顔に不気味な笑みを浮

かべ、下の廃墟を、にやにやししながら眺めていた。

2ちゃんねるサーバー、爆発。2ちゃんねる、アクセス不能。

File 04 run away (後書き)

To be continued

File 05 start of bloodshed

「この作戦のメインは、2ちゃんねるの破壊にあるんだよ」

マハールと呼ばれたその男性は、にやつきながら言った。

「さあ・・・、次のステージに進むでしょうか」

マハールは、そう言いつつ、下を見下ろした。そこには、パトカー、消防隊が次第に集まり始めていた。それを見て、マハールは再びにやりとした。

利夫は、警察署で、警察官から事情を聞かれていた。

「ほ、本当です！本当に、銃を持った少女が入ってきたんです！」

「その部分はもう聞いていますから、落ち着いて続きを聞かせてください」

机の向かいに座っている警官は、冷静な顔をしてメモを書いていた。

「は、はい」

「で、その少女は何歳くらい？」

「顔もまどもに見ていなかったの・・・」

利夫はうつむきかちに答えた。

「あつた」

利夫の家を調べていた警官が、郵便受けから一通の封筒を取り出した。

「何だ？」

別な警官が、寄ってくる。

「これは・・・別になんとも無いみたいだな、プライベートもありそうだし、本人に開けてもらうか」

「そうだな」

横の警官の同調も得て、その封筒はそのまま郵便受けに戻された。

その時、封がしていなかったのか、ひらりと手紙が浮かび落ちてくる。

”デューーーーー”

その文字をちらりと認識した警官は、その手紙を拾い上げる。横
枠の入っている手紙の上のほうに「デューーーーー」
「とある

だけで、その下は真っ白だった。

「これは・・・誰かのいたずらか？」

「・・・・・・えっ!？」

取調べの警官は目を丸くする。

「あっ」

利夫は、顔を真っ青にする。

「君が、2ちゃんねるにいたずらをした・・・？」

しまった、口が滑った。利夫は、必死に首を横に振る。

「な、何でもありません！」

「・・・・・・本当のことを言いなさい」

警官はそう言い、利夫の顔を窺^{つかが}う。

「はい・・・、最初はちょっとしたいたずらのつもりでした・・・」

利夫は、うつむいて、薄々と話し始めた。

「つまらない日常が、嫌になったんです」

「手口は？」

「はい、2ちゃんねるのHTTPに攻撃をかけたんです・・・」

「具体的に？」

取調べは、延々と続いた。

して、秘書は郵便受けを確認する。

「うん？」

女性の秘書は、郵便受けから一通の封筒を取り出す。

その窓ガラスの正面にあるビルの屋上に立っていた男は、数百メートル離れた大臣室を眺めながら、手に持っていたライフル銃を、スキーのカバーに入れる。

「さて……、さつさと退散しないとね」

男はそう言い、ポケットから携帯電話を取り出す。

「もしもし、マハール様、ご指示通りに防衛大臣を殺害しました」

「防衛くんを殺しちゃった？じゃ、次は文部科学大臣をお願いね、明日の昼くらい？ああ、手紙も忘れないで」

携帯電話で、マハールはくすくすしながらそう答えた。マハールは携帯電話を閉じると立ち上がり、目の前の集会所の舞台に、舞台脇から入ってきて真ん中近くに立つ。

「我々は……、ついに行動を起こす時に来た！」

舞台上、マハールは演説していた。観客たちは、いつせいに歓声を上げた。

「静粛に」

マハールは落ち着いた声でそう言い、観客たちの反応を見る。静まると、声をさらに強めて言った。

「日本国……、この国に依っていただけでは、現在の不安定な世界情勢を打開できない……、今こそ日本政府を乗っ取る時だ！日本政府を、我々の手の下に掌握するのだ！」

File 05 start of bloods (後書)

To be continued

「臨時ニュースです！防衛大臣、岡本魁おかもと けい氏が銃殺されました！繰り返します！防衛大臣、岡本魁氏が銃殺されました！」

ニュースで、テーブルに座っているキャスターは、興奮気味に原稿を読んでいた。

「そ、それでは、政治に詳しい浜崎さんをお呼びしております」

キャスターが言うと、隣に座っている、浜崎と呼ばれた白髪でしわがれた顔をしている男は、静かに言った。

「落ち着いてください」

「は、はい、すみません、失礼いたしました」

キャスターは、何度も何度も首を横に振る。

「すみません、代わりましょうか？」

別なキャスターが、横に立っていた。

「は、はい、すみません」

キャスターは交代した。新しいキャスターが、カメラに向かって言う。

「申し訳ございません、先ほどの方は少々リラックスされています、えー・・・それでは浜崎さん、改めてよろしく申し上げます」

「こちらこそお願いします」

「では、今回の銃殺の背景には、何が考えられますか？」

キャスターが尋ねると、浜崎は落ち着いた顔をして語る。

「亡くなった岡本氏は先月末に才能を買われ内閣改造により初めて防衛大臣に就任したばかりで、この就任に対する批判は全く無く、むしろこれを喜ぶ声が多く上がっております。この事態になった理由は、わたしにもわかりませんが、おそらく自分の批判が民衆の喜びの声にかき消された人々が企んだものと思われれます」

「何でこつた……」

先ほど利夫の家の捜索から戻ってこのニュースを署のテレビで見た警察署員は、齒軋りをする。

「秘書によると、大臣は暗殺直前に、デュー……………と書かれた手紙を読んでいたということですよ」

キャスターがこう続けると、その署員、そしてもう一人の署員は、目を丸くする。

「な……………」

「どうしたんだ？」

同僚の署員が尋ねるが、二人にとってはそういうことは眼中には無かった。二人の口からは、同時に同一の単語が出てきた。

「報告だ」

「一歩間違えれば犯罪ですよ？」

警察官にそう言われ、背中を軽くたたかれた利夫は、「すみませんと、ぺこりと頭を下げて、取調室から出る。

廊下を、付き添いの警察官と一緒に歩いている途中、どたばたして走っている二人の警察官とすれ違う。

あれは何だろう……、と、利夫は、軽い気持ちで振り向いていた。まさかそれがあの、国家転覆すれすれの恐ろしい計画の始まりだったとは気付かずに……………

「防衛大臣が僕の手はず通りに殺されたのね」

マハールは、舞台上、友と話しているかのような口調で、そこにいた聴衆に語りかける。

「僕らは次に、しなければいけないことがある。国家の大臣が殺された以上、賽は投げられたのだ！今回の事件の裏に潜む果てしなく大きな闇を示すために、警察署にあるこの事件の捜査本部に配属された署員を……………塵殺^{チンキョウ}する……………！」

聴衆たちは、いずれも武装をしていた。ライフル銃に、硬い黒い服に、黒いヘルメットに。マハールの語っていることの重大さを前もって知っているかのように、そこは一転して、重い空気が漂う。マハールは、一呼吸をして、続ける。

「さあ……、行こう、我等が同土たち！」

”デューーーーーー”

防衛大臣が暗殺された49分後の午後4時58分、突如、銃声。

文部科学大臣の崇徳忠敬氏すうとくただたか、頭に弾を受け即死。

テレビ局は、テレビ東京系を除き全てが、この連続大臣殺人事件の臨時ニュースでもちきりになっていた。

「桐生きりゅうさんは今日も熱心なのね」

机に向かつて書類を懸命に処理している、黒いスーツをしたその背中に、女性は語りかける。

「あ……ああ、何だ、水鶏くいなか」

桐生と呼ばれたその男は、後ろを振り向く。水鶏と呼ばれた女性が、立っていた。

「お茶持ってきてくれたの？」

桐生が尋ねると、水鶏は首を横に振ってから、一枚の書類を桐生に渡す。

「……これは」

桐生は、その書類を一瞥いちへつすると、立ち上がる。

「私も配属されましたの」

水鶏が言くと、桐生は「そうか」とだけ言くと、歩いてその部屋を出る。水鶏も、その後をついて行く。

「警察署はこの事態を受けて捜査本部を設置、事件を早急せいせきに解決すべく努めています」

キャスターがこう言うのと同時に、その音声をイヤホンで聞いていたマハールは、イヤホンを外すと同志たちに号令をかける。「行くぞ！」

「これからこの作戦のリーダーを務める桐生です、よろしくお願ひします」

桐生が、一礼をする。そこは、最新の機械が配備されている部屋であつた。

「私はその補佐の水鶏です、よろしくお願ひします」

その隣の水鶏も、一礼をする。最新の機械は、入口のドアのあるほうを除く三方に配置されており、壁として取り付けられた机が三方の壁にくつついており、その上に無数のボタンやマイクなどが置いてあつた。入口から左と正面の壁にはモニター、右の机には最新のパソコンが並んでいた。

「私は元プログラマーの下田朝霜しもたあさしもです、よろしくお願ひします」
桐生と水鶏の周りに、円を描くように立っている一人が頭を下げる。

「私は主に暗号解析を担当させていただく紅氷見人くれないひみとです、よろしくお願ひします」

同様に、隣の人も頭を下げた。

「私は行動班のリーダー桂蛇平素かつらへびひらもです、よろしくお願ひします。要請の結果、自衛隊を20人程度派遣していただくことになりました、偵察などに使わせてください」

こつい男が、ぎこちなく頭を下げた。

「私はここの手伝いをさせていただく雨森黒あまみやくろです、よろしくお願ひします」

「同じくここの手伝いをさせていただく縁緑徹ひみととおるです、よろしくお願ひします」

「同じく甘田八朔にじむつたはつちかです、よろしくお願ひします」

「同じく金銀濱地きんぎんはまぢです、よろしくお願ひします」

「予備として配属された樋渡有人ひぐわい ひとですが、暗号化に自信があります。よろしく願います」

「同じく予備ですが、甲子園春夫こうしえん はるおです、よろしく願います。爆弾について詳しいです」

「予備の水村璋みすむらた まきです、よろしく願います」

「あわせて12人ですか・・・」

桐生はそう言い、水鷄を一瞥すると、皆に、声を強めて言う。

「では、これから私たちのやることについて説明いたします

「・

File 06 secondier (後書)

To be continued

桐生は、輪の中心で、水鶏の差し出した一枚の書類を読み上げる。「最近世間を騒がしている、2ちゃんねるがデューで荒らされているという騒動ですが、皆さんもご存知の通り先ほど防衛大臣が暗殺されました。彼は暗殺される直前に、デューと書かれた手紙を受け取っていたということです。実は、この事件が発生する数分ほど前、警視庁に一通の手紙が届きました」

水鶏が一通の封筒を渡すと、桐生はそれを受け取り、中から手紙を取り出し、読み上げる。

「我々は『八月の血祭り』、日本の転覆を最終目的とする組織だ。我々は、ついに行動を開始する、と、これだけ書かれたものです」桐生はその手紙と封筒を水鶏に戻すと、脇に挟んでいた書類を手に持って、続きを読み上げる。

「この事態に関して危惧感を持って、捜索本部とは別にこのような組織を作るに至りました。いいですか、これは国家転覆に関わる重要な任務です。みなさん、気を抜かずに頑張ってください」

「はい」

周りの人々は、一斉に返事をした。

「早速ですが、この事件の重要参考人を呼んでおります」

その、大臣二人暗殺の捜索本部の部屋のホワイトボードの前で、課長は白い長方形のテーブルに座っている多くの人々の前で言う。課長が、横に立っている少年の紹介を言おうとした矢先。

「この少年は・・・」

ピピピピピピピピピピピピピピ

「何だ、これは、警報か？」

課長がそうやって動揺したような声を上げると同時に、捜索本部の入口のドアが開けられ、黒づくめに武装した10人程度の人が乗

り込んできた。ライフル銃で、まず課長が銃殺された。

「あ……あああああああああ」

捜索本部室内は、たちまち修羅の場となった。逃げ惑い、次々と銃殺される人々。

「あああああ……っ！！」

利夫は動揺していた。その人の血をほっぺに浴び、そこをすり抜けるようにして逃げていく。

「どうした、あそこの子供も対象だぞ！」

武装集団のリーダー格の男が怒鳴ると、二人が黙って利夫を追いに走った。

「あああああっ！！！」

利夫は懸命に走ったが、銃弾が脇をかざったので、利夫は、不規則な動きをして銃弾を回避するしか考えられなかった。すれ違った警官は、一人残らず抵抗する暇も無く殺された。

そうして、足、頭、各所に銃弾をかざり、ほっぺの血に自分の血もまざる頃、動転していた利夫は、たまたまちよっただけ開いていた扉の中の部屋に入り込む。

「ああっ……！！！」

利夫は、慌ててその扉を閉める。そうして、初めてこの部屋の異様に気付く。まず、扉は他の部屋とは違い鉄扉てつび、部屋は全体的に薄暗く、モニターなどが転がっていた。そうして、目の前の人の輪に気付くと、利夫はへたへたと座り込む。

「どうしましたか？こんなところに子供が来て、しかも血まみれで……」

輪の人の一人が言うと同時に、廊下で激しい銃声が聞こえてきたので、利夫は思わず扉から離れ、輪の中に入り込む。

「何事です！？」

その輪の中心の人、桐生が言うと、下田がモニターの下のボタンをいろいろいじる。

「出ました、廊下の防犯カメラです」

壁にある17のモニターの中心にある、小さなモニターに囲まれた、縦横が小さなモニター3つ分の大きなモニターに、それが映った。武装集団と警察の突撃隊が戦っており、武装集団がじりじりと追い込まれている模様だった。

「退避せよ！」

その合図で、武装集団は一斉に逃げ出した。それを突撃隊は追いかける。

「さて」

桐生は、床に座り込んでいた利夫を見下ろす。

「一体何があつたのでしょうか？」

「は、はい」

利夫は、怯えながら返事をする。

「大臣暗殺の捜索本部の部屋にいきなりあの人達が押しかけて、塵みなづちにしたんです」

「………はい？」

桐生の手は、震えていた。

「………それで？」

「はい、僕はなんとか逃げてみたんですが、それでも……もう分かりました」

桐生は、利夫に言う。

「安全が確保され次第、この部屋から退出してください」
「怖いんです」

利夫は、ふらふらと立ち上がる。

「………え？」

「僕、家で殺されかけたんです」

「えっ？それって、まさかデューと書かれた手紙が」

「そんな手紙は来ていないんですけれど」

「それじゃ、名前は……」

桐生はそう言い、水鶏に手を差し出す。水鶏が別な書類を渡すと、桐生はその書類を読む。

「……霧間利夫君？」

「はい」

利夫は、全身中に怪我をしていて、テーブルにもたれるのがやつとであった。そんな様子に気付いたのか、桐生はしばらく考えてから、ちらと甘田を見る。

「医療班に連絡を」

「はい」

甘田は、モニターの下に無数にあるボタンから探して押し、マイクにしゃべる。

「医療班ですか？こちら八月の血祭りテロ対策本部、怪我人が一人、直ちに来てください」

それだけ言うと、マイクのスイッチを消す。

「救急車は……？」

利夫がかすれた声で尋ねると、桐生は冷静に言った。

「来ませんよ」

「はい？」

利夫は、一気に顔を青ざめる。

「ま、まさか、僕を殺す気ですか……？」

「落ちついてください、私たちはあなたの味方です」

桐生がにっこりと語りかけると、利夫はそこにかたんと座り込む。

「はあ、はあ……そ、そうですか……」

その顔は、半信半疑だった。

↳ To be continued

小説で知り合った友達に、友達のメルマガに小説を連載しないかと誘われましたので、ラヴコメを書いてみることにしました。

<http://www.mag2.com/m/00000269815.html>

メルマガ作りに僕も深く関与しすぎたためか、創刊準備号では僕が「こんな内容はどう？」と尋ねたらあっさりそのまま発行されたせいで、友達ではなく僕の連絡先が載ってしまうアクシデントが発生しました。友達もちよつと反省したみたいで創刊準備号2からは友達も少しは書いていますが、臨時号のお詫びの言葉は僕が書かされました。やっぱり僕が僕ですと友達も友達なんでしょうか。(代筆の件は後でちゃんと話をつけています) 友達はさすがにHTML知識は無いようなので、HPは僕が作ってます。

でも僕と似ている友達だけにちよつと見過ごせないので、メルマガがあまりにすっからかんだったので、まあ夏休み終わるまでならと思って書いたのですが、あまり出来はよくないと思います。

ともかく長い前置きで失礼しましたが、僕が生まれて初めてラヴコメとして書く小説ですので、ぜひ読んでください。(今までの小説はみんなファンタジーとして書いたラヴコメなので、ラヴコメとしてラヴコメを書いてみたかった・・・魔法も少々入ってますが)

あ・・・この小説のジャンル(サスペンス)とはかけ離れてましたorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5998e/>

デュ-----

2010年10月9日03時56分発行